

『ブヴァールとペキュシェ』論 (その1)

大 貫 徹

外国語教室

(1989年8月29日受理)

Essai sur "Bouvard et Pécuchet" de Gustave Flaubert (1)

Tohru OHNUKI

Department of Foreign Languages

(Received August 29, 1989)

Bouvard et Pécuchet, oeuvre posthume de Gustave Flaubert(1821—1880), a été certainement fort discutée. Mais, en dépit de l'enthousiasme qu'elle a beaucoup suscité, surtout auprès d'un grand nombre de flaubertistes, elle reste encore très méconnue des lecteurs, parce que le sujet, la mésaventure des deux bonhommes et la structure de cette oeuvre, la répétition extrêmement inlassable de toutes leurs tentatives, déroutent, déçoivent plus d'une fois l'attente d'une action dramatique ou d'une évolution psychologique des personnages.

Ainsi, il s'agit pour nous de mettre en évidence le statut romanesque, d'ailleurs tout à fait menacé, de ce livre.

Dans ce petit essai, nous nous proposons, d'abord, d'analyser de près la particularité de son titre : *Bouvard et Pécuchet*, parce que le titre : *Bouvard et Pécuchet* constitue sans nul doute un élément fort essentiel qui permettrait de comprendre l'originalité propre de ce texte.

—

ギュスターヴ・フロワーベル (Gustave Flaubert) が、その突然の死 (1880年5月8日) によって、未完のまま放置せざるを得なかった最後の長編小説『ブヴァールとペキュシェ』("Bouvard et Pécuchet") についていささかなりとも論じたいと思う。尚、この作品を読むにあたっては、以下の版を使用した。それゆえに、ページの指定は、特に断らない限りすべて以下に示した版によるものである。

Gustave Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, édition présentée et établie par Claudine Gothot-Mersh, Collection Folio, Gallimard, 1979

さらに、この拙論では、その序論にあたる第一章だけを議論の対象とするつもりである。というのも、この「第一章」という、冒頭の章は、全十章からなる本文草稿(いちおう物語形式をとった部分のみを考えている。具体的には、先のフォリオ版で49ページから414ページまでの部分である)の内の単なる十分の一というだけではなく、セナリオ(Scénarios)のある段階までは、作品全体を大きく三部に分けた内の「第一部」もしくは「序論」に相当すると作者が考えていたからである¹⁾、また、多くの人が指摘するように²⁾、「第一章」は一方で、[残りの]

九章からなる本論の導入部の役割も果たす。それは、小説の内部を映し出す凹面鏡のようなものであり、作品全体のテーマを凝縮して見せてくれる」章であると一般的に考えられているからでもある。つまり、この「第一章」には、言ってみれば、作品のすべてがある以上、この章だけを検討すれば、ある意味ではこの作品すべてについて言及したことになると思うからである。

それでは、まず最初に、きわめて素朴な疑問から出発したいと思う。この作品の題名である『ブヴァールとペキュシェ』("Bouvard et Pécuchet")とは、そもそも何を意味しているのか、という疑問である。というのも、「ブヴァール」それに「ペキュシェ」という固有名詞(洗礼名)を単に二つぶっきらぼうに並置しただけのこの題名は、非常にありきたりで、いわばどこにでもある題名というだけではなく、さらには、この題名が含意しているもの、つまり「この作品では、題名に示されている〈ブヴァール〉それに〈ペキュシェ〉という名前を持つ二人の男達を主人公とする物語が描かれているのだ」ということをこの題名自体が如実に示しているという意味で、この題名はこの上なく明瞭なものであるように思われるにもかかわらず、実際にはかなり奇妙な題名なのではないかと思うからである。

そもそも、題名に限らず、一般的に「AとB」という形で、ある二つのものが並置されるならば、普通は、い

わゆる二元論的対立 (dualisme) という概念を思い浮かべる筈であろう。例えば、スタンダール (Stendhal) の有名な作品『赤と黒』 (“Le Rouge et le Noir”) (1830年) では、赤によって代表されるもの (ナポレオンの壮図) に鼓舞されながらも、王政復古の時代では、黒によって代表されるもの (聖職者の身分) にその身を投じなければ、その本来の野心が成就出来ない青年ジュリアン・ソレルの姿が描かれているのであるが、明らかに、ここでは、「と」をはさんで並置されているものが一種の対立的概念として存在しており、そうした過酷な対立的状況を主人公のジュリアンがまさに必死の思いで生き抜いて行こうとしているのであるし、またさらに例をあげれば、フローベールのこの作品とほぼ同時代に書かれたモーパッサン (Guy de Maupassant) の『ピエールとジャン』 (“Pierre et Jean”) (1888年) ではもっとはっきりと、接続詞「と」で並置された二人の主人公であるピエールとジャンとが、実際には、嫡子と庶子という、文字通りの対立的関係にあることを知ったことから生じる、さまざまな問題が生々しく描かれており、しかもそこでは、そうした対立を止揚することなど到底できかねるような、まさに救いの無い状況が細かな心理分析を伴って、綿々と描かれてさえいるのである。いや、フローベル自身にも、このような二元性をはっきりと認めることが出来る作品が多くあり、例えば、『感情教育』 (“L'Éducation sentimentale”) (1869年) における、フレデリック (Frédéric) とデローリエ (Deslauriers), さらに土地の対立的組合せとしての「パリ (Paris) とノジャン (Nogent-sur-Seine)」などをその典型的な例としてあげることが出来るであろう。つまり、ここで言う二元論的対立とは、一方が他方と対立関係になることで、より一層、他方 (と同時にこちら側) の意味や輪郭が鮮明となるという、ある意味では予期せぬ、一対的組合せによる相互作用の働きを意味しているのである。こうしたものが、一般的な「と」の使用例であるとするならば、フローベールのこの作品の場合はどうなのであろうか。果たして上の例のような二元論的な世界を描いていると言えるのであろうか。答えは明らかに「否」である。それどころか、我々はむしろ、この作品にあっては、外見的には二元論的対立を思わせるこの題名が、実際には、その物語内容と大きくズレているときえ言いたいと思う。というのも、そこでは、上で述べているような意味での二元論的対立など少しも見られず、むしろそうした二元論を遙かに超越したような地点、言うならば二元論的対立などは単なる相対的な対立・差異に過ぎないのだと言わざるを得ないような地点こそが問題とされているように思われるからである。

それでは、以下に、この題名が、一体どのように奇妙

なのであるのか、いささか詳しく述べてみたいと思う。だが、ここで直ぐさま、題名の奇妙さについて言及する前に、まず簡単にこの作品の粗筋について触れておきたいと思う。なぜならば、ここで我々は、例えば、アポリネール (Guillaume Apollinaire) の『異端教祖株式会社』 (“L'hérisiarque et Cie”) のように、題名それ自体がきわめて奇妙であると言っている訳ではないからである。言うまでもなく、題名とその作品の内容とを比べた場合に、そこに、ある種の居心地の悪さ、より正確に言えば題名と物語の中味との間に一種の不均衡があると主張しているからである。それでは、以下に、この作品の簡単な粗筋を紹介しよう。但し、この拙論の議論が、主として第一章を巡ってなされている以上、第一章を中心に粗筋を述べるつもりである。

夏のある暑い日曜日の昼下がりに、年齢が共に47歳で、さらに筆耕という職業までも偶然に同じであった、ブヴァールという名の独身男とベキュシェという名の独身男がパリの一隅で偶然に出会い、その出会いの最初の瞬間から、なぜか二人はお互いに強く惹かれ合い、その結果これまたきわめて偶然に転がり込んで来た、ブヴァールの叔父 (実際には実父) の遺産を元手に、田舎に農園付きの邸宅を買入れ、そこで念願であった本当の自立的・自活的な生活を二人で始めようとする。そのために、彼等二人は共に、まず、農学・園芸学を皮切りとして、化学、医学、天文学、考古学、文学、政治学、……と、その土地で生活する際に生じたいろいろな事件に敏感に反応しては、上のようなさまざまな学問に、次々と熟中することになるが、しかし、それらにことごとく失敗してしまい、結局はもとの筆耕の生活に二人とも戻っていくことになる……。

このような簡単な粗筋だけでは明確には分からないであろうし、実際には、後に詳しく展開するつもりであるが、とりあえず、次のことだけは、ここで述べておきたいと思う。『ブヴァールとベキュシェ』という題名は、フローベールの (世間的には) 処女作と言える『ボヴァリー夫人』 (“Madame Bovary”) の場合と同じく、この作品の二人の主人公の名前を、並置の接続詞「と」 (et) をはさんで並べることで、「この作品が二人の独身男達の経験するさまざまな物語を描いているのだ」ということを、奇妙なところか、むしろかなり明確に示しているように見えて、その実、上の粗筋の中でも何度か言及していることで多少なりとも分かるように、——例えば、「共に」という言葉でよく示されているように、この二人にはあまりにも多くの「偶然の一致」が生じるのである。その

一例として、この二人の最初の出会いの場面の一節をあげておこう。というのも、ここに現れる、不自然なほどの《*même*》の連続に注意したいと思うからである。明らかに、フローベールは、この時、彼に関してよく言われる文体上の配慮云々という地点とはまったく異なる地点に立っているように思われる。

大通りの中ほどにやって来ると、彼等は、同時に、同じベンチに腰をおろした。⁹⁾(傍線は引用者)

Quand ils furent arrivés au milieu du boulevard, ils s'assirent à la *même* minute, sur le *même* banc. (p. 51) (c'est nous qui soulignons)

——この作品では、主人公が二人である必然性が、ましてやこの二人の間に先に述べたような意味での二元論的対立が存在しているというようなことなど、少しも感じられないのである。そのように感じられないどころか、むしろ、こう言ってよければ、この二人があたかも一体化しているかのように、もう少し大胆に言うならば、あたかも「ブヴァレベキュシェ」——《*Bouvard et Pécuchet*》という題名を一息で発音した音を仮りにカタカナで綴るならば、大体このようになるであろうし、また実際に、多くのフランス人読者は、この題名をそのように発音している筈である——という名前のただ一人の主人公しか実際には居ないかのように感じられてしかたがないのである。題名が明示しているように、本来、二人の主人公がいるにもかかわらず、——この二人は、偶然の符合を確かに多く持ち合わせてはいるが、しかし実際には、それ以上に、多くの対照点・対立点をも持ち合わせているように描かれているのである。例えば、工藤庸子がその間の事情を巧みに要約している一節を借りれば、「同じ帽子をかぶるにしても、ブヴァールはあみだにひっかけ、ベキュシェはとがった庇のしたでうつむいている。《黒ぐろとした直毛が、まるで鬘をかぶったように禿げあがった額にはりついている》ベキュシェとは対照的に、ブヴァールのほうは《自然に縮れてかるく渦を巻いた金髪》。大柄なブヴァールは《腹あてのついたズボン》で太鼓腹をつつみ、ベキュシェのほうは、胴長で貧弱な身体をフロックコートにかくしている。歩き方はといえば、ブヴァールは大腿、ベキュシェは裾をはきながら、ちょこちょこすすむ。性格もはっきり対立する。一方は信じやすく、そそっかしくて、大まか。他方は用心ぶかく、苦労性で、しまりや。要するに、セナリオによればブヴァールは《粘着質》、ベキュシェは《胆汁質》なのである。」⁴⁾というように、二人の間にはかなりの相違点・対立点が見られるのである。——この二人が一体化してしまって、あたかもただ一人の主人公しかい

ないかのように感じられるという、この落差感こそが、今まで何度も言及してきた、題名の奇妙さという思いを、ある程度は惹き起こしたと言えるのではないかと思う。つまり、「偶然の符合」と「多くの対照性」という、それ自体きわめて相反する現象がこの二人の間には見られるのである。だが、これだけではない。というのも、これだけであるならば、「あたかも一体化した、ただ一人の主人公しかいない」などという不思議な実感は得られないように思うからである。さらにその向うに何かがあるのだ。それゆえに、以下の部分では、その何かについて考えてみたいと思う。

二

例えば、次のような場面では、一体どちらが言葉を発していると言えるのであろうか。これは、第一章の終わり近く、ようやくのことで田舎への引越しも終わり、彼等は嬉しさのあまり自分達のものになった庭を真夜中過ぎにもかかわらず一廻りしている際の場面である。

彼等は、大声をあげて野菜の名前を呼ぶのが嬉しくてならなかった。「あ、人参だぞ！ やあ、キャベツだぞ！」

Ils avaient plaisir à nommer tout haut les légumes: < Tiens: des carottes! Ah! des choux. > (p. 72)

ブヴァールとベキュシェのうち、一体どちらがこの言葉を発したのであろうか。恐らく、ここでは、二人で同じ言葉を交互に、あたかもこだまを楽しむかのように、次々と発していたと考えるのが、この物語の論理的整合上、最も妥当な判断と言えるのではないかと思う。しかし、今さら言うまでもないことだが、テキストの上では、そうした判断を根拠づけるものが、例えば、次のような形で明記されているわけではない。

それから、彼等は、果樹嚮を調べた。ベキュシェは、若芽を見つけようとした。(傍線は引用者)

Ensuite, ils inspectèrent les espaliers. *Pécuchet* tâcha de découvrir des bourgeons. (p. 72) (c'est nous qui soulignons)

これは、先に引用した一節の直ぐ後に置かれたものなのであるが、ここでは、先の引用箇所とは違って、行為の主体が、明確に「ベキュシェは……」と示されているのである。さらに、もう一つの例をあげよう。それは、作品のほぼ冒頭に位置する場面からとった例である。

「これはこれは！」と彼は言う。「同じことを考えたわけですな。帽子に名前を書いておくなんて。」「なるほど、その通りですな。勤め先で間違われたら困りますからね！」

—<Tiens!>dit-il<nous avons eu la même idée, celle d'inscrire notre nom dans nos couvre-chefs. >

—<Mon Dieu, oui! on pourrait prendre le mien à mon bureau!>(p. 52)

この場合は、お互いの帽子の裏にそれぞれの名前が記されていることをお互いに偶然に見つけ合った後で、始めて親しげに言葉を交わすという場面である。この時、<dit-il>と記された一節の<il>が二人の内のどちらであるのかは、確かに、明確ではない。しかし、この不確かさは、一番先に引用した段落に見られる曖昧さとは、その性質がかなり異なるものと言えるであろう。というのも、この第三人称単数形が指示しているものが、ブヴァールなのかそれともベキュシェなのか、なるほど、ほとんどはっきりしないとは言え、しかし、ここでは、二人の人物の間で確かに言葉が交わされているのだということがきわめて明確に示されており、しかも、この場面ではそのことだけで、物語論的には充分なのである。それゆえに、この一節には、文法的にはもちろんのこと、物語論的な意味においても、曖昧なところが少しもないと言えると思う。それに対して、72ページから引用した前述の一節では、ただ単に、直接話法で記された言葉の発話者が二人のうちのどちらとも同定出来かねるというだけでなく、ここには、物語論的に言って、きわめて奇妙な事態が生じているように思われるからである。それは、まず第一に、前のところでも簡単に触れた「偶然的符合」ということと、ある意味では通じていることなのではあるが、この二人の間には、——恐らく「無意識の内に」ということであろうが——お互いの動作の反復あるいは模倣⁹が行われているのではないかということである。事実、そうした「反復もしくは模倣」的振舞というものは、この作品では、少し詳細に読んでみれば分かるように、この72ページからの引用箇所だけでなく、他のところでもよく見られる得るものなのである。例えば、その一例として、第一章の終わりに位置する一節をあげよう。ここでは、上で述べた、「多くの対照性」と「偶然的符合」との共存及び移行が絶妙に描かれているのだが、その時、恐らく、二人の間で無意識下での「反復もしくは模倣」が行われているように思われるからだ。

服を脱いで床に入ってからも、二人はしばらくしゃべっていたが、やがて寝入ってしまった。ブ

ヴァールは仰向けに、口をぼかんと開け、何もかぶらずに。ベキュシェは、右脇を下にして、膝を腹のところで蝦なりに曲げ、木綿のナイトキャップをおかしな風にかぶっていた。——そして、窓から射し込む月の光を浴びながら、二人はそろって鼾をかいていた。

Déshabillés et dans leur lit, ils bavardèrent quelque temps, puis s'endormirent; Bouvard sur le dos, la bouche ouverte, tête nue, Pécuchet sur le flanc droit, les genoux au ventre, affublé d'un bonnet de coton; —et tous les deux ronflaient sous le clair de la lune, qui entrait par les fenêtres. (p. 73)

最初の文は、語りとしてはきわめて普通のものであろう。その中の「やがて寝入ってしまった」と記された箇所もごく自然なものであって、そこには反復も模倣もない筈である。つまり、この二人の姿を語り手がごく普通に描写しているに過ぎないのである。そして次のところでは、語り手は、二人の対照的な寝相をいささか要約的に描いている。この寝相の違いは、先に示した二人の性格の違い、すなわち、ブヴァールが大まかなのに対して、ベキュシェが用心深いという違いをそっくりそのまま受け継いでいると言えるであろう。そうした相違点を記した後で、例によって、語り手は「偶然的符合」という一種のデウス・エクス・マキーナを持ち出してくる。「二人はそろって鼾をかいていた」と翻訳できる一節<……et tous les deux ronflaient……>には、文法的にも、意味論的にも、少しも奇型的なところがなく、誰でもこの一節が意味する情景を思い浮かべることが出来る筈であろう。そこには、昼間の疲れからか、ぐっすり寝入ってしまった二人の姿が、念願の田舎によく移って来たという満足感を多少なりとも漂わせながら、いささかユーモラス的に描かれているだけである。しかし、半過去形で書かれたこの一節は、引用箇所の最初に出て来た「二人はしばらくしゃべっていたが、やがて寝入ってしまった」<……ils bavardèrent quelque temps, puis s'endormirent……>と単純過去形で語られた一節と同じく、客観的描写の一つに過ぎないのであろうか。この一節だけで判断するならば、もちろん、そうであろう。だがしかし、このゴト＝メルシュ版で僅か23ページに過ぎないにもかかわらず、第一章を最初からこの最後の一節まで詳しく読み進めると、「二人はそろって鼾をかいていた」というこの最後の描写が、先に引用した<même>の連続の一節(51ページからの引用)と重なり合ってしまうのである。そして実際、51ページからの引用箇所もこの第一章末尾のところと同じく、「多くの対照

性」を示した後に、あたかもそうした対照性を逆に強く打ち消すかのように「偶然の符合」が語られているのである。

二人の男が現れた。

一人はバステューエ監獄の方から、そしてもう一人は植物園の方からやって来た。大柄な方の男は、麻地の服を着ては、帽子をあみだに被り、チョッキの胸元をはだけ、ネクタイを手に持って歩いていた。小柄な方は、栗色のフロックコートの中に身体が隠れ、前底のどがった鳥撃ち帽の下に顔を伏せていた。

大通りの中ほどにやって来ると、二人は、同時に、同じベンチに腰をおろした。

Deux hommes parent.

L'un venait de la Bastille, l'autre du Jardin des Plantes. Le plus grand, vêtu de toile, marchait le chapeau en arrière, le gilet déboutonné et sa cravate à la main. Le plus petit, dont le corps disparaissait dans une redingote marron, baissait la tête sous une casquette à visière pointue.

Quand ils furent arrivés au milieu du boulevard, ils s'assirent à la même minute, sur le même banc. (p. 51)

地図上で確かめるまでもなく、いささかでもパリの土地になじみがあるならば明らかなように、この二人は、まさに正反対の方向からやって来たのであり、しかもさらに、こうした対照性をより一層際立たせる形で、二人の服装が描かれている。それだからこそ、繰り返して使われている「偶然の一致」という語句がひととき効果的に「偶然の一致」を示していることになるのであろう。これと同じ事態がこの章末尾の箇所でも生じているのではなかろうか。つまり、二人の対照性を強く打ち消すかのように「偶然の符合」が語られる……という風に。とするならば、「二人はそろって駢をかいていた」という文は、51ページの出会いの場面を持つある種の非現実的抽象性と同じ抽象性を分かちあっていると考えられないだろうか。つまり、言い換えるならば、先に引用した、「……et tous les deux ronflaient sous le clair de la lune……」という一節は、「……et tous les deux se faisaient entendre les mêmes ronflements sous le clair de la lune……」とでも仮りに言い直すならば明瞭となるように⁹⁾、実はその裏に、51ページの引用箇所と同じく、「même」が隠されているのではなかろうか。それゆえに、この箇所は、正確に言えば、純粋な描写というよりは、むしろ何か別なもの、強いて言うならば、物語上の整合性を遙かに越えた地点で成立する抽象的描写とで

も言うしかないようなものなのではなかろうか。この間の事情をもっと正確に述べてみよう。つまり、「服を脱いで床に入ってからも〔中略〕やがて寝入ってしまった」から「ブヴァールは〔中略〕木綿のナイトキャップをおかしな風にかぶっていた」までは、確かに、この二人の姿の描写と言えるであろう。しかし、「——et」をはさんで事情は一変するように思う。あたかも、「——et」という記述表現が別な次元への入口であるかのように……。もとより、男が二人ともそろって駢をかくという事態が起こらないとは言えないであろう。いやむしろ、しばしば見られる状況と言えるかもしれない。しかし、我々はこの一節を世の中によくある事態の再現という風にはとらない。というのも、この一節は、先に、そこにはデウス・エクス・マキーナ的作用に近い「même」が隠されているのではないかと示唆したことで明らかのように、事実の単なる再現を越えた非現実的抽象性を帯びていると思うからだ。

だがこれだけではない。我々は、さらにもう少し先に進んでみたいと思う。なぜならば、先ほどここにある筈ではないかと想像した「même」は、51ページの連続する「même」とはその働きが微妙に違っていると思うからである。51ページの場合は、「à la même minute」とあることで明確なように、あくまでも同時性が強調されている。これに対して、この73ページの場合は、同一的行為が強調されているということになる。つまり、この後者の場合は、同時に同一の振舞いをしたということが語られているのではなく、ただ同一の仕草をしているということが述べられているだけなのである。ここにこそ、我々は、前述した意味での、「反復もしくは模倣」的振舞いの現れを見たいと思うのである。確かに、このテキストの上にはそのようなことが明記されているわけではないし、さらにまた、ベキュシェがブヴァールの仕草を反復・模倣したのか、それともその逆に、ブヴァールがベキュシェを反復・模倣したのか、もちろん、明確に断言できるわけでもない。でもそこには、この両者の間に「反復もしくは模倣」的振舞いがあったのだと言いたいような——しかも、もうそこでは、どちらがどちらを反復・模倣したのかが決して問われないような、また問うてもまったく意味がないような——状況が存在しているように思うのである。そして、これと同じような事態が、この拙論で一番最初に引用した72ページの引用箇所にも生じていると思われる。つまり、72ページの引用箇所の「彼等は、大声をあげて野菜の名前を呼ぶのが嬉しくてならなかった」という一節は、どちらがどちらを反復・模倣したのかがまったく問題とならないような地点で——別な言い方をすれば、「もはや、物語論的な正当性などがまったく問題となっていないであろう地点で」

ということになる——生じている「反復もしくは模倣」の振舞いであると思うのである。

だがここでより重要なことは、我々は、単に、そのような反復・模倣が奇妙だと言っているのではないということである。我々は、あくまでも、物語論的には二人の間に「反復もしくは模倣」の振舞いがあったと思われるのにもかかわらず、それがテキストの上に十分に反映されていない場合が多々あるという点こそが大変に奇妙だと言っているのである。それは、この作品の語り手が、そうしたことにさほど自覚的ではないことから来ているのではないかと思われる。と言うのも、その直ぐ前では、語り手は、次のように述べているからである。

そして彼等は、お互いに幾度となく繰り返した。
——「とうとう来たね！ ありがたいことだ！ まるで夢のようだ！」
... et ils se répétaient : —《Nous y voilà donc! quel bonheur! il me semble que c'est un rêve!》(p. 72)

ここでは、この二人が田舎に着いた喜びをお互いに口にして見事に見事に描かれているのだが、明らかに、語り手は、「彼等は、お互いに幾度となく繰り返した」と明記することで、同じ言葉を二人が交互に反復・模倣しながらお互いに相手に投げあっているということに、この箇所では、かなり自覚的である。これに対して、先の72ページからの引用文では、そうした記述がまったく欠けていて、そうしたことにほとんど無自覚なのである。これは、一体どうしたわけなのであろうか。ここで、こうした語り手の心理的考察などする気もないし、また、そのようなことをわざわざする必要も認めないのであるが、しかし、ただ一言だけ触れるならば、この作品の語り手は、上で言及したような意味での、「反復もしくは模倣」という主題体系にかなり無自覚であるがために、ある意味では、物語論的に言って、きわめて曖昧な文章を語ってしまっているということである。ここで、念のために一言言い添えておくと、我々の言う「無自覚である」という意味は、そうしたことに意識的になったり、ならなかったりと、そこには絶えず一貫した態度が認められないということを意味しているのである。それゆえに、この語り手が、もしそうした点にかなり自覚的ならば、先の引用箇所を、例えば、52ページに倣って、

——《Tiens!》 dit-il 《des carottes!》
——《Ah! des choux.》

とするか、あるいはまた、先の72ページの例のように、

Ils avaient plaisir à se nommer tout haut les légumes : 《Tiens : des carottes! Ah! des choux.》

と代名動詞形で書いたであろうと思われる。かくして、この作品においては、「語り」と「それによって語られたもの」との間に、言い換えれば、説話論的水準と物語論的水準との間に生じた一種の不調和もしくは一種のズレをしばしば指摘することが可能となろう。事実、そうした例の最も典型的なものは、以下に紹介する一節であると思われる。引用がいささか長くなるが、煩を厭わず引用したいと思う。

早くも彼等は、シャツのそでを腕までまくって、花壇ぞいに薔薇を刈りこみ、鋤で雑草を取り除き、土を耕し、チューリップの鉢を植え替えたりしている自分達の姿を想像していた。雲雀のさえずりで眼を覚まして畑に出かけ、籠をかかえてリンゴを採りに行こう。それからバター作りや、麦打ちや、羊の毛むしりや、蜂蜜の巣の世話などを監督に出かけよう。そして、牝牛の啼き声や刈りとられた乾草の匂いをうっとり楽しもう。もう筆写なんかはしない。上役達もいやしない。支払期日さえ気にすることはしないのだ。

Déjà, ils se voyaient en manches de chemise, au bord d'une plate-bande émondant des rosiers, et bêchant, binant, maniant de la terre, dépotant des tulipes. Ils se réveilleraient au chant de l'alouette, pour suivre les charrues, iraient avec un panier cueillir des pommes, regarderaient faire le beurre, battre le grain, tondre les moutons, soigner les ruches, et se délecteraient au mugissement des vaches et à la senteur des foin coupés. Plus d'écritures! plus de chefs! plus même de terme à payer! (p. 66)

これは、ブヴァールの叔父（実際には実父）の遺産が手に入ることが確実となったために、二人して「いっしょに、田舎に引っ込もうじゃないか！」とお互いに決意した箇所のすぐ後に置かれたものである。ここで、この二人は、どの田舎に落ち着くべきかという、その落ち着き先が定まらない内から、もうすでに「早くも」田園生活を楽しげに夢想しているのである。したがって、この場面では、語り手の視点が二人の内面にあり、その二人の内面で生起するさまざまな夢想が語られていると言えるであろう。とするならば、この一節には、かなり奇妙な、いやむしろ、かなり不気味なところがあると言わざるを

得ないように思う。とりわけ、最初に出てくる代名動詞《se voir》が、《se voyaient》と第三人称複数形形で使われていることが問題なのである。仮に、ここの文章が、第三人称単数形を主語として、《……il se voyait en manches de chemise, au bord d'une plate-bande émondant des rosiers……》のように記されているならば、少しも問題とはならないであろう。というのも、誰しも、自分の将来の姿を、例えば、夢想という形で想像することが可能であるからである。しかし、それが、二人の人間がまったく同じ夢想をする、しかも、その細部まで同じであるということになれば、話は別である。そうしたことは、絶対とは言えないまでも、ほぼ不可能なことであるからだ。つまり、ここの箇所はあまりにも現実離れしているのである。現実とは、例えば、同じフローベールの『ボヴァリー夫人』に描かれている、次のような一節に示されているものではないか。

[シャルル]は、夜、娘がランプの下で自分達のそばで仕事をする姿を想像した。[以下略]

エンマは眠っていなかった。眠ったふりをしていたのだ。そして、シャルルがそばでうとうとと眠りに落ちる間に、彼女はほかの夢想のうちに目覚めるのであった。

四頭の馬が駆けるままに彼女は一週間以来もうそこから二度と帰らぬ新しい国へ運ばれていた。

[Charles] se la figurait travaillant le soir auprès d'eux, sous la lumière de la lampe; [……]

Emma ne dormait pas, elle faisait semblant d'être endormie; et, tandis qu'il s'assoupissait à ses côtés, elle se réveillait en d'autres rêves.

Au galop de quatre chevaux, elle était emportée depuis huit jours vers un pays nouveau [……] (pp. 200-201) (ページの指定は、Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, édition présentée et établie par Claudine Gothot-Mersch, Collection Classiques Garnier, Garnier, 1971 による。)

もはや、そこには以前の愛情が見られなくなったとはいえ、隣同士に寝ている夫婦がまったく違った夢想を紡いでいるというこの状況こそが現実の姿なのではないか。とするならば、『ブヴァールとベキュシェ』という作品は、リアリズムの巨匠と文学史の中では位置付けされるのが通常であるフローベールの最後の長編小説であるにもかかわらず、ある意味では、物語の、いわゆる本当らしさをかなり放棄してしまった作品とも言えるのではなかろうか。もちろん、この「本当らしさ」の放棄ということは、作者がこの作品を執筆するにあたって、い

ゆる「事実」をまったく無視してしまっているということの意味しているわけではない。というのも、我々が実際に今使用しているフォリオ版の編集者であるゴト＝メルシュ女史がこの版のいささか長い序文の中で、ことに、その14ページから16ページにかけて詳しく紹介しているように、フローベールは、この作品を書くために、ほかの場合と同じく、いやむしろ、作品の題材の関係もあって、これまで以上にさまざまな書物を数多く読み、さらには、主人公が引っ込むことになる田舎の土地を探すために、この二人組さながらの頻度でさまざまな土地を何度も実地検分したりしているからである。それゆえに、先に我々が「この作品は物語の本当らしさを放棄している」と言ったことは、単なる「事実」のレベルでの話ではなく、あくまでも、いわば、「語り」と「物語」との間に生じるズレもしくは不均衡に関わるレベルでの話なのである。つまり、作者が、「事実」にどんなに細心な注意を払ったとしても、また、語り手が、そうした「事実」をいかに物語の中に配置するかということに関して、これまたきわめて細心の注意を注いだとしても、この作品においてはどうしても、物語論的に言って、奇妙な、もしくは不気味な事態が生じてしまうのである。この間の事情をやはり、先のゴト＝メルシュ女史の長大な序文から引用すると、女史は、「フローベールは、『ブヴァールとベキュシェ』を書くにあたって、リアリズム小説の美学に従おうと何度も譲渡したのだが、でも、この小説は、その図式的側面、その反復的構造（試み－失敗－再び新しい試み）、その単調な筋書、その時間軸の混乱、その戯画的な登場人物、その素っ気ない文体などがやはり我々の眼を強く惹きつけてしまう。それゆえに、『ブヴァールとベキュシェ』とは、リアリズム小説を越え、むしろ、哲学的コントの伝統に結びついているのである。」⁷⁾と述べているのだが、確かに、ゴト＝メルシュ女史も言うように、この作品は、いわゆるリアリズム小説というよりは、むしろ、ヴォルテール (Voltaire) の『カンディッド』(“Candide, ou l'optimisme”) (1759年)などに代表される哲学的コントの方に近いものなのである。だからこそ、『ボヴァリー夫人』には見られた「本当らしさ」が、この作品ではほとんど見られないのである。というのも、哲学的コントとは、その厳密な定義はともかく、ヴォルテールなどに見られるように、何よりもまず、社会に対する批判的思考を具現する場 (ジャンル) として存在している以上、そこではどうしても、物語の「本当らしさ」が、物語全体が意味するものに従属せざるを得ないように思われるからである。つまり、何を語るのかの方が、物語の細部における整合性より遙かに優先されているのである。

逆に言うならば、ここでは、作者の意識が作品の全域

にくまなく及ぶことがまったく不可能であるような作品が問題となっているのだとも言えよう。あるいはまた、別な言い方をすれば、作者による作品の全面的な統御を妨げるような力がどこかで働いているとも言えるのではないかと思う。そうした力を、今、何と呼ぶべきか分からないが、でもともかくも、そうした力こそが、この作品における「語り」と「物語」との間の不均衡を生み出すことに大きな作用を及ぼしているのではないかと思う。つまり、「語り」が「物語」に従属しているならば決して起こらないであろうような奇妙で奇型的な事態が生起するというのも、この作品では、「語り」と「物語」とが調和を保っているようでいて、その実、突然不意に、その間に乖離が生じてしまうからである。例えば、*«Ils avaient plaisir à nommer tout haut les légumes……»* や、あるいは*«Déjà, ils se voyaient en manches de chemise……»*などの引用箇所の記事は、なるほど、第三人称複数形を主語として書かれてはいるが、実はむしろ、そうした複数形を越えた地点にいる、第三人称単数形としての「ブヴァレベキュシェ」こそが、そうした文章の隠れた本当の主語であるかのように書いてしまうことで、語り手の内部で、「物語」の裏付けを持たない「語り」という事態が生じてしまっていると言えるのではなからうか。そうした意味では、次に紹介する一節などは、今、上で言及した我々の仮説を強く支えてくれるように思われる。

彼等は、この件についてはいっさい人に洩らすまいと誓いあった。だが、彼等の顔はついほころんでしまう。そこで、彼等の同僚達は、彼等のことを「妙だぞ」と思いはじめた。

Ils s'étaient juré de taire tout cela ; mais leur figure rayonnait. Aussi leurs collègues les trouvaient <drôles>. (p. 67)

この一節には、遺産問題もようやく片付き、後は、落ちてく先の田舎を選ぶだけになった時の二人の様子が描かれているのであるが、ここには、一見何も奇妙なところがないように思われる。実際、誰でもこの一節の意味する情景を思い浮かべることが出来るであろう。二人の間の秘密を他人には決して洩らすまいと思いつつも、思わず嬉しさが込み上げてくるといった状況は、誰も経験するところであり、そういう意味では、多くの人の共感を得ることが可能である一節とも言えるであろう。しかし、より詳しくこの一節を見てみると、きわめて奇型的な表現があることに気がつかざるを得ない。それは、*«Aussi leurs collègues les trouvaient <drôles>»* という文章に見られる第三人称複数形の使用である。とい

うのも、この時、この二人の同僚達は、言うまでもないことだが、まったく別な集団だからである。つまり、ブヴァールの同僚達は、ベキュシェ及びその同僚達を知らず、また逆に、ベキュシェの同僚達は、ブヴァール及びその同僚達を知らない筈なのである。そうであるならば、ここで、「彼等の同僚達」が「彼等」を妙だと判断するのは、絶対とは言えないまでも、ほぼ不可能なことと言わざるを得ないのではないか。そもそも、「彼等の同僚達」(leurs collègues)というカテゴリー自体、ここでは、絶対であり得ないのではないか。したがって、物語論的に言えば、この箇所は、本来ならば次のようになる筈であろう。

そこで、ブヴァールの同僚達は、彼のことを「妙だぞ」と思いはじめた。そしてベキュシェの同僚達もまた、彼のことを「妙だぞ」と思いはじめた。

Aussi, les collègues de Bouvard le trouvaient <drôle>, et ceux de Pécuchet, eux aussi, le trouvaient <drôle>.

もちろん、こうした文章が普通に成立する筈はないであろう。というのも、あまりに冗長であるからである。しかし、そうだからと言って、物語論的に奇妙な文章を書いてはよいというわけではないであろう。つまり、ここでは、単に作者の不注意にはとうてい還元できないような事態、逆に言えば、我々が普段眼にするような小説や物語における「語り」とは、まったく異なる次元の「語り」が——しかもさらに、この引用箇所を上のように言い直してみれば明らかとなるように、ここでも再び「反復もしくは模倣」という主題体系が見られ得るのである——なされているのだと言いたい。それでは次に、この種の次元の「語り」とは、さらには、上述の主題体系との関わり合いとは、一体いかなるものであろうかという問題が生じる筈であろう。だがしかし、これについては、それを論じるのにふさわしい紙幅が要請されねばならないであろう。それゆえに、この問題については、三以下で詳しく論じたいと思う。

註

- 1) これは、すでに本文で註記しているフォリオ版に付けられた、編者ゴト＝メルシュ女史による——この作品に関する包括的な紹介の役目を果たしていると言えるであろう——いささか長い序文からとったものである。フォリオ版、13ページ。(尚、このフォリオ版を時には、その編者の名前をとってゴド＝メルシュ版と呼ぶこともある。)

- 2) そうしたことを述べている研究者等の名を一々あげるのは、きわめて煩に耐えないので、ここでは、下記の論文からの引用をその代表的な例としてあげたいと思う。

工藤庸子 「フローベールとブヴァール」(『文学』第56巻 第12号, 岩波書店, 1988年, 169ページ下段)

- 3) この論文中の和訳は、すべて筆者による訳である。但し、フローベールの作品の和訳は、それぞれ、以下の既訳を参照した。

『ブヴァールとベキュシェ』は、鈴木健郎訳, 岩波文庫, 1954年, さらには、新庄嘉章訳, 筑摩書房「フローベール全集」第五巻, 1966年。

『ボヴァリー夫人』は、生島遼一訳, 新潮文庫, 1965年。

- 4) 前掲書, 168ページ上段から下段。
5) ここで、「反復あるいは模倣」、さらには、後に頻発することになる表現を例えば「反復もしくは模倣」というような言い方をしているのは、まず第一に、

我々は、「反復」が無意識的な繰り返しであるのに対して「模倣」が意識的・自覚的繰り返しと考えているからであり、次に、この論文の中でも何度か触れているように、この二人の間で行われていることが、果たして「模倣」と呼べるほど明確的に意識的な繰り返しなのか、それとも単に「反復」と呼ぶべきものなのか、きわめて曖昧であるからである。いやむしろ、ここは正確には、「きわめて曖昧に書かれているからである」と言うべきであろう。いずれにせよ、この二人の間には、「反復」とも「模倣」とも断言できぬ、この上もなく曖昧な形での、同一的な行為がしばしば見られるのである。それゆえに、そうした点をも含意するように、絶えず、「反復」と「模倣」とを一つにしているのである。

- 6) もちろん、これは、文意を明確にするために筆者が勝手に書き直したものである。言うまでもなく、実際には、このような文章が世の中に存在する筈がないであろう。
7) 前掲書, 34-35ページ。